

2023.9.28

大谷祖廟報恩講

信心をうればあかつきになるがごとし

高山 四衢 亮

<光について>

弥陀成仏のこのかたは  
いまに十劫をへたまえり  
法身の光輪きわもなく  
世の盲冥をてらすなり

智慧の光明はかりなし  
有量の諸相ことごとく  
光暁かぶらぬものはなし  
真実明を帰命せよ

解脱の光輪きわもなし  
光触かぶるものはみな  
有無をはなるとのべたまう  
平等覚を帰命せよ

光雲無碍如虚空  
一切の有碍にさわりなし  
光沢かぶらぬものぞなき  
難思議を帰命せよ

(親鸞聖人『讚阿弥陀仏偈和讚』)

この無碍光仏は、観音とあらわれ、勢至としめす。ある『経』には、観音を宝  
応声菩薩となづけて、日天子をしめす。これは無明の黒闇をはらわしむ。勢至を  
宝吉祥菩薩となづけて、月天子とあらわる。生死の長夜をてらして、智慧をひら  
かしめんとなり。  
(親鸞聖人『唯信鈔文意』)

「攝取心光常照護」というは、信心をえたる人をば無碍光仏の心光、つねにて  
らしまもりたまうゆえに、無明のやみはれ、生死のながきよ、すでにあかつき  
なりぬとしるべしとなり。「已能雖破無明闇」というは、このころなり。信心  
をうればあかつきになるがごとしとしるべし。  
(親鸞聖人『尊号銘文』)

\*あかつき＝「あかとき」の転。未明。夜明け近くのまだうす暗い時刻。

「あかつき」は、宵・夜中・暁と、夜を三つに分けたその一つ。後世は明け  
方に近い時間をさすようになった。「あかつき」は「あけぼの」よりやや早  
く、まだ明けやらない暗い時をいう。「しのめ」は明ける直前をいい、「あ  
けぼの」は空がうっすらと明るくなることをいうが、しだいに混同されるよ  
うになる。

<真宗の信心>

一には決定して「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来常に没し常に流

転して出離の縁あることなし」と深信すべし。二つには決定して「かの阿弥陀仏の四十八願、衆生を摂受したまう、疑いなく、慮なくかの願力に乗ずれば定んで往生を得」と深信せよとなり。  
(『愚禿鈔』)

<疑う暗さ>

不了仏智のしるしには  
如来の諸智を疑惑して  
罪福信じ善本を  
たのべば辺地にとまるなり

罪福信ずる行者は  
仏智の不思議をうたがいて  
疑城胎宮にとどまれば  
三宝にはなれたてまつる

(親鸞聖人『仏智疑惑和讃』)

<自力>

異学というは、聖道外道におもむきて、余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり。これは外道なり。これらはひとえに自力をたのむものなり。別解は、念仏をしながら、他力をたのまぬなり。別というは、ひとつなることをふたつにわかちなすことばなり。解は、さとりという、とくとことばなり。念仏をしながら自力にさとりなすなり。かるがゆえに、別解というなり。  
(親鸞聖人『一念多念文意』)

<明らかになる暗さ>

浄土真宗に帰すれども  
真実の心はありがたし  
虚仮不実のわが身にて  
清浄の心もさらになし

五濁増のしるしには  
この世の道俗ことごとく  
外儀は仏教のすがたにて  
内心外道を帰敬せり

かなしきかなや道俗の  
良時吉日えらばしめ  
天神地祇をあがめつつ  
ト占祭祀つとめとす

(親鸞聖人『愚禿悲歎述懐』)

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。  
(親鸞聖人『信巻』)